



長尾和宏(ながお・かずひろ) 医学博士。公益財団法人日本尊厳死協会副理事長としてリビング・ウィルの啓発を行う。映画『痛くない死に方』『けったいな町医者』をはじめ出版や配信などさまざまなメディアで長年の町医者経験を活かした医療情報を発信する傍ら、ときどき音楽ライブも。

334

脚本家 山田太一

部活とアルバイトに明け暮れた青春時代、ときどき見ていたテレビドラマで一番印象に残っているのは、1977年に放映された『岸辺のアルバム』(TBS系)です。

1974年の台風16号で実際に起こった多摩川水害を題材にした衝撃的なこの作品。しかし、濁流で家屋が崩壊する前に、家庭が内から崩壊していくさまを描いており毎回胸がざわつきました。

それまで清純派女優の代名詞だった八千草薫さんが、不倫相手とラブホテルに入るシーンは約半世紀たった今も脳裏に焼き付いています。

あのドラマで浮彫りにされたのはまさに「家族」という病。ありふれたホームドラマで描かれていたような幸福な家庭など本当は実在しないと教えてくれたのが、この人だったのかもしれない。

この『岸辺のアルバム』のほか、サザンオールスターズのナンバーを

四苦八苦から目をそらさず



散りばめた苦々しい青春群像劇『ふぞろいの林檎たち』(TBS系)など数々の名作ドラマを手掛けた脚本家の山田太一さんが、11月29日に川崎市内の施設で死去されました。享年89。死因は老衰との発表です。

山田さんは2017年1月に自宅で脳出血で倒れ救急搬送。そこから執筆

活動は困難になりました。同年の週刊ポストのインタビューでは、ご自身の闘病生活についてこんなふうに語っています。少し長い引用ですが紹介します。

「人生は自分の意思でどうにかなることは少ないと、つくづく思います。生も、老いも。そもそも人は、生まれたときからひとりひとり違う限界を抱えている。性別も親も容姿も、それに生まれてくる時代も選ぶことができません。

生きていくということは限界を受け入れることであり、諦めを知ることでもあると思います。

でも、それはネガティブなことではありません。諦めるということも、自分が「明らかになる」ことでもあります。良いことも悪いことも引き受けて、その限界の中で、どう

生きていくかが大切なのだと思います」

仏教用語である「生老病死」という言葉は、皆さんも日常的に使うことがあるでしょう。では同じく仏教用語の「四苦八苦」の意味は知っていますか? 「四苦」というのは、人間誰もが逃れられない苦しみ、すなわち「生老病死」です。そこにさらに四つの苦しみ——「愛別離苦」(愛する人との別れる苦しみ)、「怨憎会苦」(おんごうえく、怨み憎しみをもつ人と出会わねばならぬ苦しみ)、「求不得苦」(ぐふとっく、どんなに求めても手に入らない苦しみ)、「五蘊盛苦」(ごうんじょうく、心も体も自分の思い通りにはいかない苦しみ)が足されて、「四苦八苦」となります。

山田さんは人間の四苦八苦から目をそらさず作品を描き続けました。それでも生きていかねばならぬことも、教えてくれました。